

翻訳の技法

牧野 力 著

早稲田大学出版部

翻訳の技法

牧野 力 著

早稲田大学出版部

牧野力（まきの・つとむ）

元早稲田大学教授

著書『ラッセル思想と現代』（研究社）

訳書『中国の問題』（理想社）その他多数

1980年3月10日初版発行 1981年4月30日再版発行

翻訳の技法

検印省略

著 者 牧 野 力

発行者 城 下 幸 雄

発行所 早稲田大学出版部

〒160 東京都新宿区戸塚町1-103

振替東京3-1123 電話(03)203-1551

© 1980 Tsutomu Makino

松濤印刷

1082-3275-9314

まえがき

人生には、皮肉というか、奇妙というかそんなところがある。人間の生きる舞台が移り変わるためであろうか。

二年前には、まさか、自分が読みづらい訳本に触発されて、こういう本を書くことになろうとは、夢にも考えていなかったからである。

実はこの執筆の発端には、ささやかながら、筆者には生々しいある経験があった。

日本で一流と誰にもみなされている某出版社が、国際的に注目を浴びている社会科学の問題について、一冊の訳書を出版する予告をした。店頭に現れるのを、一日千秋のおもいで待った筆者は、やっとそれを手にした。電車の中で開いてみたい気持を抑えて、帰宅した。

原著者がどういう視座から、どのように筆をすすめて、論旨を説くか、それをじっくり味わうのが楽しみだったからである。

サテ、読み始めて、驚いた。

読みづらいこと、何とも言いようがない。活字は日本語でも、わかりにくい概念の唯の羅列という化けものだ。それでも、五十頁ほど辛抱した。

でも、結局投げ出した。だが、二、三日して、気を取り直して、また読み出した。直訳文から、原文を類推したり、原作の内容を想像したりした。矢張り、駄目だった。原著者のためにも、日本の読者のためにも、残念である。たまたま、原語に通曉している同僚に、慣用表現とか、直訳文から推定される原文について、尋

ねて、やっと内容が確かめられた。

読者にとって、こんな罪なことはない。これがその時の心情であった。

こうは言っても、この心情には、訳者に向けられた怒りはなかった。筆者にも、少しばかり、戦後から翻訳を手がけた経験があったから、自分も、これに近い化けものを読者に押しつけていたかも知れないぞ、という気持が、この訳書と呼び水にして働いていたのかも知れない。

しかし、触発はこれだけではなかった。それは、日本の高度成長時代以来、安定成長期に入っても、一向に衰えを見せそうな翻訳ブームの余波しぶきに接したからである。

読者もご存知のように、日本では明治以来長い間、翻訳は外国語から日本語へという受容一本槍に近い状況であったのに、近頃は日本語から英語へという逆の作業が非常にふえ、翻訳する人も、国際色豊かに在日外人が加わっている。戦前から戦後しばらくの間は、翻訳家の顔触れは主として学者、教師、評論家、作家などであったのに、昨今では、翻訳を専業にする人々が現れ、企業化されている。従って、翻訳家志望者もふえた。特に、大学生の中に、この傾向が目立つ。そのせいか、翻訳家養成校も少なくない。翻訳関係の雑誌も立ち消えるどころか、充実してきた。また、翻訳入門書も、外国書の紹介・訳出の時代から、日本人自身が主体的に執筆・出版する時期に入っている。蘭学やエゲレス語の学習時代からすると、本格的な脱皮が行われた観がある。

ところが、大学生や新卒社会人のこの翻訳志向の傾向にも手放しに喜んでいられないフシもある。ある種の誤解が潜在しているからである。つまり、在学中の語学能力への評価、成績に対する自信から、(自信をもつのは結構であるが)、語学能力が翻訳能力にそのまま直通するという感覚があるらしいのである。語学力は

翻訳力への大前提であり、大いに役立つことは勿論だが、語学者の頂上を目指すことと翻訳の難所・関所を通過することとは全くと言いたいくらいに性質のちがった面がある。だから、どこがどうちがうかに、気付けば、彼らの持ち前の能力を更に伸し、社会に役立てられる。

今日の英語教育の現状では、「教室英語」は英文構造のかかり読解が主位を占め、理解した内容を自然で判り易い日本語に訳出するにはどうすればよいか、といった点にまでは、教室では手が及ばない。だから学生が勘違いしても学生には罪はないと言えるかも知れない。(この点についてはあとで触れたい。)

翻訳が上達するのは、一にも二にも、実地の修業と観る人が多い。それには、もっともな理由がある。翻訳には自学自習、自解自悟の面が濃いからである。時には、折角、学校で苦心しておぼえた文法事項を越えて、その目の前の文意に対応し、工夫を要求されることが少なくないからである。その工夫は大体ケース・バイ・ケースでちがうことも少なくない。こういう半面をズバリ言い切った名人がいる。

『翻訳論ノート』はついにノートに終わった。理論らしい結論のなかったのは、抽象的な翻訳理論など無用というのが、つまり、結論である。大事なことは、むづかしい翻訳論などに先走りするよりは、その間に、訳出せんとする外国語を少しでも、マスターすることである。

〔中野好夫『翻訳論ノート』〕

以心伝心の日本人的名人の風格を思わせる洞察である。

翻訳はコトバを操る技術であるから、理屈よりも原語上達を説くのは当然である。しかし、その時その時で独自の工夫や技術が必要とする翻訳にも、それらをまとめて通観すると、ある共通事項が浮ぶ。更に系統的な整理も必ずしも不可能でない。これらを知ったなら、直ぐ名訳が出るわけでは絶対ないが、実地訓練上の

注意点に、日頃から注目を怠らないという意味で、また、それが能力向上への踏み石となるという意味で、これらの共通事項を心得えて、日頃努めるのは決して無用ではないように思われる。事実、卒業前に自発的に翻訳演習を受講した学生について言えば、その訳文は、(教室英語)における訳文や答案とは大分ちがってくる。少なくとも、翻訳する上の心得のミニマム・エッセンシャルを自得する。その仕上げは更に本人の精進を待つ外ないとしても、翻訳技術上の共通項を示すのは学生にはないよりましと思う。

(読者に罪な) 翻訳書に触発され、また翻訳ブームの学生に接触して(過去の拙訳への反省が表面に浮上して)、この本を書くことになった。“多年の蘊蓄を傾けて”などと言う気持ちからは、サラサラない。翻訳についての所感を随筆風に書きつらねたに過ぎない。ひと言お断りしたい。

本書の後編での実地演習に使った英文はほとんど随筆論文であって、小説は乏しい。もっとも、既刊の翻訳入門書や上達書は(巻末、付録参照)、多く、小説を素材にして、誤訳指摘と改訳提示とを行っている。小説に素材を求める方々は、それらから開眼の契機をつかんで頂きたい。

執筆に当り、筆者が、今迄共感を抱きあるいは、啓発された点を、本書に引用し、その出典を明記した。謹んで謝意を表したい。引用された点に関心を寄せる方は必ず原典にも当たって頂きたい。

筆者の多忙かつ遅筆による出版期日の切迫にもかかわらず、善処して頂いた早稲田大学出版部の諸氏に心から御礼を申し上げる。

昭和五十四年師走

牧 野 力

目 次

まえがき

前編／翻訳とは何か

1 裏切り者か，反逆者か	3
2 翻訳の定義	7
3 翻訳を拒むもの	11
〈付〉訳詩不可能論について	
4 翻訳を支えるもの	19
5 意味をきめるもの	23
6 “忠実な”訳とは？	39
7 文体は翻訳の分身	46
8 名訳への開眼	52
〈付〉日本の現代小説とその英訳版との対照研究	
9 翻訳と通訳	81
〈付〉機械翻訳	
10 日本の英語教育	91
〈付〉英和辞典のあり方	

後編／翻訳技法演習

1 技法十則	149
2 技法演習	162
A 演習問題とヒント	162
B ヒント解説と参考訳	174
付 録 ◇参考書目	195
◇翻訳関連団体	199

前編 翻訳とは何か

Ⅰ 裏切り者か、反逆者か

〔古い警句のふくみ〕

翻訳という言葉が出ると、“翻訳者は裏切り者である”(Traduttore, traditore) という古いイタリアの警句を思い出す人は多いと思う。しかし、“翻訳者は反逆者なり”と訳す人もいる。また、“翻訳は反訳なり”と言い換える人もいる。

イタリア語を知らない筆者も、二語の綴字をくらべて、Tradとtore とが繰り返されているのに気がつくと、「ハア、語呂合せか」という風に、気の利いた警句のねらい、くらいはわかる。諺というよりも、警句調のこの二語がどうして、あれ程人々の口にのぼるのか、一体どうして、翻訳者が裏切り者や反逆者になるのか。

意味が翻訳に関する事柄だけに、軽妙とか奇抜とかただ言うだけではすむまい。何か深いふくみがありそうな気もする。これは筆者ただ独りの詮索癖だけでもなさそうである。この警句を解きほぐして、次のような発言が生れるとしても、不思議ではないように思う。

翻訳者が裏切り者になるのは、必要に迫られて、自分の意に反してのことである事実を忘れている。

また、

裏切り者になるのは、誤訳でなく、知っていても、どうにもならない問題である²⁾。

上の“必要に迫られ”“意に反して”“どうにもならない問題”

などの発言は、どういう根拠から言われるのか、翻訳には、そんな宿命的な難問がひそんでいるのか、この古い警句のふくみには、どう対処すればよいのか。

ここに、何か、翻訳の本質に迫る糸口がありそうである。

言語学者ローマン・ヤーコブソンは、この警句に、更に突っ込んだ検討を加える必要を訴えているように思われる。

もしも伝統的な(Traduttore, traditore)という表現を、(The translator is a betrayer) と英訳したとすれば、われわれはこの韻をふんだイタリアの警句から、しゃれとしての価値をまったく奪うことになってしまう。そして、認識的な姿勢をとれば、どうしても、この警句をもっと明瞭な陳述に変え、また、次のような質問に答えないわけにはいかなくなる。どんなメッセージの翻訳者なのか、どんな価値に対する裏切り者なのか、と³⁾。

ヤーコブソンの論文は、しかし、ここで終っている。この警句をもっと明瞭な陳述に拡充せよ、と読者に迫っている。

上述したように、この古い警句が、翻訳に関する内容であるだけに、“裏切り者”とか“反逆者”とかいう表現、言葉の選び方にも少しこだわらざるをえない。イタリア語と英語との間ですら、韻を充分に移しがたいのであるから、ウラル・アルタイ語系の日本語では、韻の移しかえは、まず、お手上げであるとしても、“裏切り者”とか“反逆者”とか訳す上で訳語をどう選ぶかの問題で、一寸簡単に素通りできないような気がする。これは、翻訳の本質である“原文の意味を適正で自然な日本語に移す作業・役割”から言っても、一寸ひっかかる。すなわち、原文の真意は“裏切り者”なのか、それとも“反逆者”なのか。どちらでもよいと言うのか。これは、“原意との対応”という領域の問題に関係がある。

日本語で、裏切り者と反逆者という二つの語にはどこか差がある。両者はどう違うのだろう。

1 裏切り者か、反逆者か

国語辞典の字解をもふくめて（引用は紙面の都合で省くが）、翻訳の場合、誰も次のように理解しているのではないだろうか。

裏切り者と言え、読者が原作に寄せる期待に反する訳者という感触であろう。これは原文を読解できる人からみれば、誤訳・悪訳という別な評価となるかも知れないが、日本語で読むほかない一般読者には、不自然ないかにも翻訳然とした日本語訳という、文体への印象をまず示唆するだろう。どちらの場合にも、翻訳によって、期待を裏切られたという心情を指す。訳者の肩をもてば、“必要に迫られ”“意に反して”“誤訳でなく”云々という、先に引用した発言が顔を出してくるところだろう。

反逆者という表現は、日本語の語感では、裏切り者よりも、強い。何か、権威的な人か事柄かに主体的に対抗する響きを与えがちである。

翻訳において、反逆者であるというのは一体、どういう理由からそう言えるのか、あるいは、どんな翻訳者を指すと解すればよいのだろうか。翻訳という作業での用語であるので、古い警句の訳し方のちがいとするだけでは済まされないあるこだわりを感じる。

翻訳者は反逆者なり、という警句に対する筆者の考えは、次のようなものである。

原作のもつ作品としての権威に対して、訳者が、原作の理解と解釈の上で、また翻訳という訳出文体の上で、新しい言語芸術上の価値の創造を目指して創造性を発揮し、主体的な意識に溢れた作業を行う心情と姿勢とを示唆しているような気がする。

つまり、このイタリア語の警句の心情的背景には、翻訳が内包する宿命的な困難に対する二つの姿勢のちがいがあると思われる。

「裏切り者」という意識は、宿命への受動的で消極的な姿勢で

行う困難な翻訳作業に下された評価への黙従である。それに対して「反逆者」という意識は、宿命と対決し、創造的価値への主体的挑戦という積極的な意図を秘めた姿勢である。そういう感触のちがいがあろうのではないだろうか。

二者のいずれかになるのは、原語読解力と訳出文体力とが大幅に関係する。否、それらの能力への自信の程度かも知れない。訳者の原作に対する興味あるいは翻訳の意図、また、適性の問題も無視できない。

次に、川端文学、あるいは「源氏物語」の英訳者である E. サイデンスティッカー教授の興味深い発言を引用したい⁴⁾。

The translator should be a counterfeiter⁵⁾.

この counterfeiter という語に、筆者が反逆者意識を感ずるのは、筆者の誤解という理解なのであろうか。

注1) レナード・ボジジョーリ「芸術の付加価値を創る者」『翻訳のすべて』日本科学技術翻訳協会発行、p.190.

2) 大竹勝「日本語翻訳上の諸問題」『翻訳のすべて』p.102.

3) ロマン・ジャコブソン「翻訳の言語学的側面について」『翻訳のすべて』p.311.

別訳

「古くからのきまり文句 “Traduttore, traditore 翻訳者(は)、反逆者” をもしかりに、“The translator is a betrayer. 翻訳者は裏切り者である。” という英語に訳したとすると、この韻をふんだイタリア語の警句からその類音的価値をすべて奪ってしまうことになる。こうなると、われわれは認知的態度に迫られて、この格言をもっと明示的な言明に変え、どういうメッセージの翻訳者なのか、どういう価値の裏切り者なのかという発問に答えざるを得なくなるであろう。」〔ローマン・ヤコブソン、河本監修訳『一般言語学』みすず書房、p.64.〕

4) E. サイデンスティッカー・那須聖『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』培風館。

5) 松本道弘「通訳は芸か」『翻訳の世界』1978年3月号、p.53.

2 翻訳の定義

〔関連する領域〕

イタリアの古い警句に翻訳の本質を垣間見た気がする ので、
「翻訳」の定義を考えて、その注目しなければならない核心と範囲とをハッキリさせたい。

まず国語辞典を参照しよう。

(イ) ある国語で表現された文章の内容を他の国語に直して表現すること。〔岩波国語辞典〕

(ロ) 一国語で表現された文章の内容を、他の国語に直すこと。〔岩波広辞苑〕

(ハ) (1)ある国の言語・文章を同じ意味の他国の言語・文章にうつすこと。

(2)原語を、その語の意味に相等する日本語の単語におきかえること。

(3)わかりにくい言葉、特殊な言語を一般的なやさしい言葉に言い換えること。〔小学館日本国語大辞典〕

上の(イ)、(ロ)そして(1)はほとんど同類である。

英語の translation もラテン語の translatus から出ていて、trans (=across; over; beyond 向うに)+ferre (=carry はこぶ)→「向うのコトバにする」の意味であるから、本筋では同じと見てよい。

定義と警句 (例えば, “翻訳はけだし女の如し”. 〔原文に忠実すぎる訳は愛嬌のない貞女に似て, また, 上手なほればれする訳は移り気な美人に似て原文を離れる, の意〕) とはちがう。

定義は本質的な関連要素を全般的に網羅するのに対し、警句は本質的な特徴の一部を大寫しに、かつ輕妙に表現する程、人の口にのぼり易い。

翻訳学という学問の確立を目指した学者 E. A. ナイダの定義を見よう。

翻訳はA言語の概念 (concept) の“核心” (kernel) のところだけを移し替えて、それに対応するところだけをB言語のなかで生み出すような過程である¹⁾。

また、

翻訳とは、原語で表現されている内容をそれに最も近く自然な受容言語で再現することであり、まず意味内容の点で、次に、文体の点で、原語と受容言語が実質的に対応するようにすることである²⁾。

二つの引用文の中の“A言語の概念の核心のところだけ”“原語で表現されている内容を”“まず意味内容の点で、次に、文体の点で”などの発言に注目したい。というのは、明治以来、日本人の間で、それも特に翻訳家の間で「忠実な翻訳」という着想が根深く尾を引いて、今日に及んでいる。この“忠実”とは何か、については後で言及したい。原文に忠実なのか、原意に忠実なのか、それをハッキリさせることに、翻訳の本質をつかむ一つの視点があるからである。

定義的に言えば、翻訳とはA言語で表現された内容をB言語に言いかえることである。簡単に、A言語（原文語）をB言語（訳出語）に言いかえる、と定義しても、実は、その作業過程の中にいろいろの要素がふくまれている。それらの要素がもつ性格から、“移す”とか“言いかえる”という両者を対応させる作業過程にも、訳者の意図や願望をはばむようなものがひかえている。これが裏切り者や反逆者を生み出す背景である。これらいろいろの関連要素を分類すると、主なものだけでも次のようになる。

2 翻訳の定義

- (1) 原文語による表現内容を理解する上で、〔原文語を英語として〕
 - (イ) 原文語（英語）の運用力のための英語学
 - (ロ) 言葉の性質を理解するための言語学
 - (ハ) 語意は、辞書に依ることが多いから、辞書についての辞書学
 - (ニ) 原文語の文法的理解のための文法学
 - (ホ) 原文の理解、解釈に関連する意味論・心理学
 - (ヘ) 発想、言いまわしの差異を理解するため、文化人類学、比較文化論、二か国語対照学〔例、英語の側からみた日・英語対照比較学 *contrastive linguistics*〕
- (2) 原作の内容を自然かつ適正に訳出する上で、
 - (イ) 母国語運用力のための国語学
 - (ロ) 訳出文の背景的知識である二か国語対照学〔例、日本語の側からみた日・英語対照比較学 *contrastive linguistics*〕
 - (ハ) 訳出上の表現のための文体論
- (3) 原作に関連する主題・内容の専門的知識と適性〔例、シェイクスピア劇の翻訳者には、英国史、英文学史、作劇法、というようなもの。〕

辞書は必ずしも適正な訳語を示すとは限らない。辞書をまめに引くこと、また、引くように仕向ける訳語センス、読みの深さなどが作家や作品傾向への愛着心と共に、翻訳には不可欠である。

ここでは、翻訳がどの範囲の事柄と関連するか、大体のところを示そうとしたのである。これは日頃注目すべき事項の範囲である。実践を通して、ケース・バイ・ケースに技術化されていく。言いたいのは日頃の心掛けの範囲と実践へと生かす方法、知識源に関心を向けてほしいことにある。